
貴方に惹かれる

星衣礼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方に惹かれる

【Nコード】

N9626E

【作者名】

星衣礼

【あらすじ】

シュウが告白された！？それを聞いたジョディの心は大きく揺れる。果たして彼女の恋の行方は！？組織崩壊後、数年が経っております。

第1話：貴方だけは……

今日という日に別れを告げ、太陽が西に沈みかけている。
オレンジ色の光がビルのガラス窓に反射し、辺りに幻想的な世界を
創り出す。

アメリカ連邦捜査局の一角で、女とその女に呼び止められた男が太
陽の光を背に浴びていた。

‘ I · l l l o v e y o u , ’

バタバタバタッ

慌しい足音と共に1人のFBI捜査官が勢い良く談話室に入ってきた。

「シユウが告白されたって本当!？」

彼女の名は、ジョディ・スターリング。

談話室で寛いでいた捜査官の仲間たちは、一瞬顔を見合わせた。

「え、そうなのか？」

「へー、初耳。」

この様子だと誰もそのような話は耳にしていないうのである。

しかし

「それってもしかして、諜報分析課の女性じゃないですか？」

話を聞いていたのか、後ろから部下が話に入ってきた。

「ロバート、あなた知ってるの!？」

「えっ、あ、…はい。」

ジョディに凄まれ、彼はおずおずと後退りしながら言った。

「…今朝、エレベーター内で女性が噂しているのを聞きました。」

「へー！あいつやるなー！で、赤井は何て返事したんだ？」

捜査官の1人が目を輝かせて訊く。

「すみません、そこまでは…。」

先輩FBI捜査官に申し訳なさそうに答えると、タイミングが良いのか悪いのか、その話題の中心人物が部屋に入ってきた。

「Hey！聞いたぜ？告られたんだってな？」

部屋に入るなり食いつかれて、一瞬、赤井は何のことだ？と考えるが、ややあってから合点がいき答えた。

「ああ。」

「相手は？」

「知らん。」

「で？」

「何がだ？」

「だから返事だよ。OKしたのか？」

赤井の態度がじれったい。

「さーな。」

赤井はフツと鼻を鳴らして笑った。

「つれないなー。聞かせろよ。」

こういう話が苦手な赤井は、違う場所で休憩を取ろうと思いきつさと部屋を出た。

「怪しいよな？」

「ああ。あいつ否定しなかったしな。」

面白い仲間とは対照的に、ジョディの心は複雑だった。

シュウがその女と付き合うことになったら。プライベートで2人で会うなんて、もう出来なくなるわよね。

彼の横というポジションはその女の物になるもの…。

そう思うと嫌で嫌で堪らなかった。

シュウが誰かのものになるなんて、そんなの耐えられない。

こんな考えは自分勝手だとわかっている。彼が誰と付き合いおうが自分に口を挟む権利はない。だけど。

だけど、シュウだけは誰にも渡したくない…。

昼過ぎ

「どうした？」

デスクに向かいさつきから考え事をして上の空だったジョディに、赤井は心配して言った。

「何でもないわ。ただの考え事よ。」

「そうか？」

しかし、そう言いながらも一向に赤井の方を見ようとせず、前を向いたままぼーとしている。

はあ、思わず溜息が出てしまう。本日何度目だろう。

「やはり何かあるんじゃないのか？」

先程から溜息ばかりのジョディを赤井は怪訝に思った。

「ねえ、シュウ？」

「何だ？」

「今日、この後暇？」

「いや、予定が入っている。すまない。」

あの女と？

やっぱりシュウ…OKしたんだ。

そう思うと、途端に胸が締め付けられるほど悲しくなり、涙が出そうになった。

堪らなくなつて、俯く。

「…ジョディ？」

ダメ、涙が出る。

そして、慌てて部屋を後にした。

赤井は、走り去る彼女の後姿を目で追つたが、ふと、彼女が今座っていたデスクの上に視線を落とすと、水滴が付いていることに気がついた。

「ジョディ……………」

第1話：貴方だけは……（後書き）

こんにちは。

読んでくださってありがとうございます。

ちよつと浮気心で赤井×ジヨディを書いてみました
出来心です（笑）v

赤井の恋人〃明美と想っている方、すみません！
連載ですが、めっちゃ短いのでお許しください。

第2話：渡したくない。…ずっと、

思わず飛び出して来ちゃった。

でも、彼の側にいるのは辛かった。

これって、やっぱり失恋よね？

まだ告白すらしてなかったのに…。

たとえ断られることになるとしても、こんなことになるくらいなら、もっと早くに自分の気持ちを彼に伝えておくんだった。

「ジョーディ？」

後ろから声がかかった。

その声にハッとして振り返ると、そこには赤井がいた。

彼は不思議そうな顔をしている。

「どうした？」

そう言う彼の息は少し乱れていた。

自分を心配して後を追ってきたのだろうか。

そう思うと、辛いのと合わさって泣けてきた。

目の前の赤井は困っていると思う。

だけど、一度流れ出したものは、そう簡単には止まらなかった。

「悪いが、言ってくれないとわからない。」

どうして、こんなに。

何も言わないまま泣いているジョディに赤井は、ズボンの両ポケットの中を探り、彼女に差し出した。
差し出されたハンカチにジョディの涙はますます止まらなくなる。

どうして、どうして…こんなに彼は優しいのだろう…。

それからしばらく泣き続け、やっとのことで、一番聞きたくて聞けなかった事を訊いた。

「シュウ…、付き合ってるの？」

しかし、予想外に赤井が目を見開いた。

「……誰とだ？」

「彼女とよ。」

「誰が？」

「貴方。」

赤井は考えを巡らせているようだ。

どうして彼はこういう類の話になると、こつも鈍くなるんだろう。
普段はどんな難事件さえも容易に解決してしまうと言うのに。

「俺が…？言ってることがよくわからないが。」

え？と思い、彼を見上げると本当に困惑した表情をしていた。

「違うの?」

ジヨディの質問に、どう答えたら良いのか考えあぐねているようだった。

本当に彼はこういった類の話は苦手のようだ。

「どこから、そんな話が出たのかわからんが、…違うな。」

「…付き合ってない?」

「ああ。」

さっきまで心を覆っていた雨雲が晴れていくような気がした。

赤井が溜息をついた。そしてタバコを取り出して火をつけ吸い始めた。

フーッと息を吐き、心地良さそうにしている。

「…でも…告白されたって……。」

おずおずと切り出す。

「…確かに告白はされたがな。」

「!…じゃあ、どうして断ったの?」

赤井が顔を顰め、タバコの灰がらを捨てる。

嫌なことを訊いてしまっただろうか…？

「初対面の人間にいきなり告白されて承諾など出来ると思うか？」

至極当然な答え…。

「…そ、そうね。」

なんだ…。そうだったの…。

それを訊いてなんかほつとした。

さっきまで流れていた涙は何処かへ行ってしまった。泣いていた自分がバカらしくなる。

そう思うと、自然に笑みが零れてきた。

「…変なヤツだな。」

「そうよ、悪い？」

くすくす、と笑ながらジョディは言った。

「いや…。そっちの方がいい。」

「え？」

「…お前は、そうやって笑っているほうがいい…。」

「え？」

第3話…好きでした。

今、何…て？

彼は少し横を向き、視線だけこちらに向けて微笑んでいた。

綺麗…。

彼のこんな表情、初めて見た。
ドキドキする。

心臓が破裂してしまいそうだった。
きっと、今、鏡を覗いて自分の顔を見たなら…きっと真っ赤になっているだろう。

「…シュウ？」

ジョディが呼ぶと、赤井は踵を返して来た道を歩き出してしまった。

「シュウ！」

貴方が好き…。

好きで好きで堪らないー…。

気持ち溢れ出す。

追いかけて、その勢いのまま後ろから彼に抱きついた。

「！」

彼が固まったのがわかる。

シュウ…、

貴方が

好き…です。

この気持ちだけは誰にも負けない。

抱きしめた両腕に少し力を込める。この想いが届きますようにと…。

「ジョディ…。」

自分の名を呼ぶ彼の顔は私からは見えない。

静かに風が吹き抜ける。

急に不安になった。

たぶん、とても短い時間だったと思う。だけど、そのときの私には、

この時間がとても長く感じられた。

彼が私の腕をそつと解く。

「…シュウ？」

やっぱり…私じゃ駄目なのかしら…。

だけど、次の瞬間

気がつけば、私は温もりに包まれていた。

「ジョディ…。」

彼はそう吐き、私の肩に顔を埋めた。

私の心臓は緊張でどうにかなってしまったのではないか、と心配してしまうほど速く脈打っていた。

だけど、気がついた。

彼も緊張していると…。

「ジョディ…、聞いてくれ。」

彼の吐息が耳にあたる。顔が熱い…。

「ん…？」

「俺たちは、FBI捜査官だ。」

彼はゆっくりと話し始める。

「だから、その任務上、どうしても危険は避けられない。」

「…ええ。」

「特に…俺は、特殊部隊として戦場に赴く事もある。」

ドクン

心臓が特別強く脈打った。

それは知っている…。

地方警察のSWATでは対処出来ない場合に投入されるFBIの特殊部隊、HRT。

貴方がその一員で、時には、凶悪犯とやりあって大怪我を負って帰ってくることも…。

その度に、私は生きた心地がしなかった。

私には、貴方が無事に帰ってくることを祈ることしか出来ないから…。

「…いつも生きるか死ぬかの瀬戸際にいるから…いつ死ぬかわからない。」

ええ…。

それもわかってるわ。

そんなこと…本当は考えたくないけれど。
だけど、それでも私は――。

「…それでも、…それでも、お前は…。」

私を抱きしめる彼の力が一層強くなった。

「それでも…共にいてくれるのか？」

答えは一つしかない。

だけど、気持ちがいっぱい過ぎて言葉にならなかった。
代わりに、大きく頷き彼を力一杯抱きしめる。

「貴方しかないの。」

瞳には大粒の涙。

彼を見上げる。

彼の瞳は切なげに揺れていた。

「貴方じゃないと…っ！」

それ以上、言葉が紡がれることはなかった。

「んっ。」

時が止まったかのような感覚に襲われた。

余韻を残すようにして彼がゆつくりと離れる。
私は彼に見惚れてしまっていた。

「I'll love you, Jodie . . .」

最初のキスはタバコの香りがした。
それは、苦くて、どこか切ない…。

だけど、幸せの香りだった。

第3話：…好きでした。（後書き）

こんにちわ！

最後までお付き合い頂き、ありがとうございました！

初の赤井×ジヨディ（笑）

感想など頂けると嬉しいです♪励みになりますので…！！

では、これからも頑張りますので、どうぞよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9626e/>

貴方に惹かれる

2010年10月15日21時22分発行